

1. はじめに

日本語においてスルは、動詞として最も上位の動的事態を意味すると言ってよい。述語として用いられるときは、先行する連用修飾語や格成分（名詞+格助詞）の一つと強く結びつき、それ全体で意味をなす。このとき、スルと強く結びつく格成分は、格助詞ガ、ヲ、ニが付加された名詞の3種類である。一方、朝鮮語の hata も動詞として用いられるときは同じことが言え、用法的にもスルと対応することが多い。述語として用いられるとき、それと強く結びつく格成分は、対格助詞と格助詞 lo による格成分の2種類である。主格成分と結合するのは日本語独自のもので、対格成分と結合するのは両言語に共通であり、残ったのがニおよび lo による格成分と結合する場合となる。

本稿は、スルが格助詞ニによる格成分と強く結びついた文を「〜ニスル文」（あるいは単に「〜ニスル」）、hata が格助詞 lo による格成分と強く結びついた文を「-lo hata 文」（あるいは単に「-lo hata」）と呼ぶことにし、小説とその対訳を資料に、日本語の「〜ニスル」と朝鮮語の'-lo hata'が、どのような対応関係になっているのかを探ろうとするものである。

2. 先行研究と問題点

森田(1979)は、スルの作る文型を8つに分け、その意味を分析している。本稿の「〜ニスル」はこのうち、「CヲDニする」、「……CヲEニする」、「…ハ…ニする」にあたると思われる。森田(1979)は「CヲDニする」は「対象CをDの状態にかえる『化成、』(p.253)、「……CヲEニする」は「Eの場所（人体の部分や、それによってなされる行為）にかかわってくることである」(p.254)、「…ハ…ニする」は「…に決める、の意」(p.254)としている。また、スルが他動詞であるかどうかで「CヲDニする」、「……CヲEニする」（他動詞）と「…ハ…ニする」（自動詞）を区別し、スルをナルで置き換えられるかどうかで「CヲDニする」、「…ハ…ニする」（置き換え可能）と「……CヲEニする」（置き換え不可能）を区別している¹⁾。山中(1998)は、「〜ニスル」を「ナル」「を範に取った転化表現として成立しているのではないか」(p.96)とし、変化の意味を基盤に成立していると考えているようだ。山中(1998)を受け入れた上で、「……CヲEニする」の「スル」を「ナル」に置き換えができないことを考慮すると、「……CヲEニする」も変化の意味を基盤に成立してはいるが、「スル」への固定という特殊化が進行していると言うことができる。

実際、ニが付加されている名詞（DやE）は、「……CヲEニする」においてはかなり限定されると予想される。これに対し、「CヲDニする」と「…ハ…ニする」においては、ニが付加される名詞の範囲はそれほど限定的でもなく、両者の違いもあまりはつきりしないように思える。むしろ、「CヲDニする」と「…ハ…ニする」の違いは、行為の対象が

存在する (CヲDニする) か、ある事柄に関し (……ハ) 、その想定される範囲の中から「選択」する (……ニする) かの違いのように思える。時には選択の範囲さえ明確でないこともあるだろう。この選択の意味は変化の意味から導かれるとして差し支えないが、行為の対象がどれだけ明確かは段階的なのである。また、そもそも何らかの意志的行為は決定を伴い、場合によっては選択をすることもあるだろう。結局、「CヲDニする」と「…ハ…ニする」の間に明確な線を引くのは難しいように思える。「～ニスル」は本来的には二つの類型に還元できるのではないだろうか。

さて、「～ニスル」は動的事態を表すので、日本語以外の言語に翻訳するとすれば、基本的には動詞を用いて翻訳されると予想される。しかし、実際にどのような行為を表しているかを解釈するには、ニが付加された名詞の意味と文脈が必要である。翻訳家はニが付加された名詞の意味と文脈に依存し、ケースバイケースで翻訳するであろう。ここで、翻訳の基盤は「特定の言語による表現を超越した抽象的な心的存在」(國廣 1981:63)とされる。そこで、「～ニスル」の基盤になる変化の意味は翻訳にも間接的に反映されると予想される。検証したい。また、翻訳を通して「～ニスル」は上で予想した2類型と言えるかどうか見てみる。朝鮮語への翻訳を一つの事例としたい。

「～ニスル」の一部は‘lo hata’に翻訳されることがある。李光秀(1985)は、その名詞の類型をもとに、スルと hata の対照表を作り、それが「対象物」、「時間や空間の前後関係」のとき‘lo hata’と「～ニスル」が対応するとしている。しかし、‘lo hata’の成立基盤について考察した例は、筆者の管見ではないようである。変化を表す朝鮮語の基本動詞は toyta で、変化の結果には lo ではなく、ka'i が付加された名詞を要求する。一方、lo は多様な方法を持つ。이희자・이종희(1998: 76-78)によると、その中に「変化、変成」、「資格、身分、名声」、「判断」の用法がある。これらは、「同一性」ということで一括りにでき、同一性に関わる、具体的な意味を持った動詞とともに用いられるように思える。したがって、‘lo hata’の成立基盤も「同一性」にあるのではないかと推測される。しかし、どんな場合に(具体的な意味を持った動詞ではなく) hata が用いられるのか定かではない。変化と同一性は関係が深く、翻訳家は「～ニスル」の中に同一性を読み取った時に、lo と動詞をもって翻訳し、その中に‘lo hata’も含まれるものと推測される。

3. データ概要

日本語の小説から「～ニスル」のうち²⁾、格助詞ニの付加される名詞が、いわゆる連用形名詞(を含む)である場合と形式名詞である場合を除いた例の翻訳を見た³⁾。そして、そのうち、「名詞ニする」の部分がまったく翻訳されない場合と目的語があってその目的語を越えて構造的な変換がなされている場合を除いた。このようにして得た例は、格助詞ニの付加された名詞を基準にすれば、延べ数で313、異なり数で152であった。2回以上現れた名詞を示せば1)の通りで(カッコ内は用例数。以下同じ)ある。これら34語の合計出

現回数（延べ数）は195で、総延べ数の約62%を占める。このうちで「気」が50例ともっとも多く、次いで「手、耳、口、目」といった身体部位を表す語であった。この4語の合計延べ数は56で総延べ数の約18%である。「気」を含めれば、延べ数上位の5語の合計延べ数が106で、全延べ数の約34%を占めている。このように、名詞には偏りがあり、実態もそうである可能性があるが、ここでは提示に止めたい。

1) 気(50)、手(18)、耳(16)、口(14)、目(8)、秘密(6)、問題(6)、相手(5)、対象(5)、中心(5)、話題(5)、何(4)、ひとり(4)、公(3)、休講(3)、教授(3)、背(3)、土台(3)、横(3)、嫁(さん)(3)、後(2)、奥さん(2)、基礎(2)、言葉(2)、下(2)、せい(2)、担保(2)、底(2)⁹⁾、内緒(2)、ななめ(2)、ひとりぼっち(2)、不問(2)、前(2)、留守(2) 計195

表1 データ概要

動詞・形容詞			300	
	対応成分がある	179		
		lo	102	
			hata	37
			他	65
	他	77		
	対応成分がない	121		
名詞+格助詞			13	
合計			313	

次に、前節で設定した問題を解決するために、まず、動詞や形容詞を述語として翻訳されているかどうか、また、その場合オリジナルのニが付加された名詞に意味的に対応する部分⁹⁾があるかどうかを見た。そして、それが翻訳でも名詞であるとき、(内部)格⁹⁾がloであるかどうか、またloのときhataが用いられているかどうかを見た。それが表1である。全体313例のうち、ほとんど(300)が動詞や形容詞を述語にして翻訳されていた。また、そのうち約60%(179)に対応成分があり、約40%(121)に対応成分がな

かった。さらに、対応成分があるときの約57%(102)の格がloで、約43%(77)はそれ以外であった。しかし、格がloのとき動詞がhataであるのは約36%であった(37)。言い換えれば、全体313例のうち'lo hata'で翻訳されたのは約12%ということになる。なお、動詞や形容詞を述語として翻訳されていない場合は、すべて「名詞+格助詞」となっていた⁷⁾。そのうち、格助詞がloでないもの、名詞がオリジナルに対応しないものが各々1例ずつあった。

4. 議論

動詞や形容詞を述語にして翻訳されている例のうち、299例に動詞が使われていた。「～ニスル」が動的事態を表すことが、翻訳でも明確に反映されている。また、「～ニスル」が'lo hata'に翻訳されるのはかなり限られていることが分かる。

4-1 身体部位

データでは身体部位を表す名詞は1)の5語であった。2)を見られたい。「耳ニスル」の全16例のうち15例、「目ニスル」の8例全部が、翻訳で「耳」や「目」に当たる朝鮮語

が用いられておらず、全体が動詞で翻訳されていた。「口ニスル」、「手ニスル」にもこのタイプのものが含まれ、それぞれ4例、6例であった。また、これらは身体部位そのものではなく、「口」なら話す、「手」なら持つ、「耳」なら聞く（聴覚）、目なら見る（視覚）といった、その機能に関わることである。

2) 口にする：hata[する](1), kkenayta[取り出す](1), mwutta[尋ねる](1), pwuluta[呼ぶ](1)、手にする：kkollanayta[選ぶ](1), kkiwuta[挟む](1), tulta[持つ](2), etta[得る](1), cwita[掴む](1)、耳にする：tutta[聞く](13), tulepota[聞く](2)、目にする：pota[見る](6), cikhyepota[見守る](1), hwulthepota[目を通す](1)
「口ニスル」の残りの8例と「手ニスル」の1例は、3)のように物と行為に分割翻訳されているが、物がオリジナルと対応しないタイプであった。「口ニスル」の翻訳はやはり口の機能を反映している⁸⁾。「手ニスル」の翻訳は文脈をかなり読み込んでいるが、手の機能を前提としていると言えよう。

3) 口にする：mal(-ul)hata(7), soli-lul hata(1)、手にする：senmwul=patta(1)
言葉一対 する 声一対 する 贈り物=もらう

「耳ニスル」の残りの1例、「口ニスル」の残りの2例、および「手ニスル」の残り11例の翻訳は、4)のように対応する成分があった。「耳ニスル」は自動詞文に変えられているが、全神経を集中させて聞くことを意味し、やはり耳の機能を言っている。「口ニスル」と「手ニスル」の翻訳は、それぞれの部位そのものを指しているとも機能に関わるとも言える。「背ニスル」は全3例のうち、1例は動詞のみを使って、1例はこのタイプに、もう1例は動詞のない「名詞+助詞」に翻訳されていた。動詞のみを使った翻訳 kitayta は背の機能とも言えなくはないが、このタイプ（および「名詞+助詞」タイプ）への翻訳は背そのものの意味から「（正面から見て）背の方向」のような意味へと派生したものと思われる⁹⁾。併せて4)に示す。

4) (全身を) 耳にする：(on mom-i) kwi-ka toyta(1)、口にする：ip pakk-ey nayta(1), ip-ey tayta(1),
全身一主 耳一転 なる 口 外一處 出す 口一處 当てる

手にする：son-ey tulta(9), son-ey cwita(2)、背にする：kitayta(1), tung=cita(1), paykyeng-ulo(1)
手一處 持つ 手一處 掴む よりかかる 背=? 背景一lo

以上のように、身体部位を表す名詞の現れた「～ニスル」の翻訳はほとんどがその機能を表すか、それを前提にした翻訳がなされていると言うことができる。したがって、翻訳のしかたも、ある程度は限定されるであろう。

4-2 対象の明確性

多くの場合、「～ニスル」は目的語を伴って現れるか、文脈から復元できる場合が多かった。すなわち、行為の対象は比較的用意に同定できた。若干の例を挙げれば5)のようである。最初の例は目的語「こういうもの」とともに現れている。次の例は文脈から「本気にする」対象は「いたずら」と解される。また、三番目の例は、より広い文脈から、逃走中の男を説得して警察に出頭させたことだと理解できる。

5) こういうものを一緒にしてはいけない : i motun kes-ul tongilsensang-ey noh-ase-nun an toy-
このすべてのこと一対 同線上一處 置く一順一話 否なる一

pnita 《唯野》、いたずらだったけど、トットちゃんは本気にしたから : cangnan-ey pwulkwaha-
終 いたずら一處 すぎない一

nteyto thotho-nun cenmallo kulen cwul al-ass-ta 《トット》、自分の手柄にしているんだろう : calna-n
逆 トット一話 本当に そのようなもの 知る一過一終 できがル一冠

chek-ul hayya-keyss-e? 《理由》

ふり一対 する一必一推一終

だが、次の6)のような場合は、「…ハ…ニする」タイプとも目的語の省略とも取れる。最初の例を目的語の省略ととるならそれは授業か講義ということになるだろう。しかし、授業の予定という脈絡なので、「休講にする」と同列の選択肢は「授業をする」しかなく、選択肢としての意味はあまりない。二番目の例では材料（ピーマンと玉葱）、食事、献立などを目的語と想定できるがどれも決めがたい。と同時に、食事や献立なら、それに助詞ハを付加し、そして主題省略をした「…ハ…ニする」タイプとも取れる。

6) 来週は一回、休講にします : taumcwu-ey-n hanpen hyukangha-keyss-supnita 《唯野》、
来週一處一話 一度 休講する一推一終

ピーマンと玉葱をスライスしてサラダにし : phimang-kwa yangpha-lul cal-key ssel-e saylletu-lul
ピーマン一共 たまねぎ一対 薄一副 切る一順 サラダ一対

mantul-ko 《博士》

作る一順

さらに、次の7)では目的語、すなわち行為の対象の復元も、選択範囲の設定もできない。しいて言えば「次にすること」程度の漠然としたものであろう。

7) 少し休んでお茶にしましょう : com swi-myense cha-lato masi-ca 《キッチン》、話は、
少し 休む一同時 お茶一同類 飲む一勸

ちょっとお休みして、おやつにしたら : yayki-nun com issta ha-ko kansik-ina mek-kela 《トット》
話一話 ちょっと あって する一順 間食一選 食べる一命

このように、身体部位によらない「～ニスル」は、行為の対象の明確さという点でも、選択範囲の明確さという点でも、はっきりと二分できるわけではない。また、翻訳を見ても、取り立てて二分できるような特徴は見られないように思える。

4-3 loを使った翻訳

ここでは、hata 以外の動詞で翻訳されている例を見る。まず「作る」系統の動詞 mantulta が9例、cista が1例あった。何か手を加え新しい物を出現させることを表す。元の物はその新しい物と同一視される。8)は文字通りの変形、改造ではないが、対象となる人物への行為者の積極的なアプローチによる、「嫁さん」への地位もしくは属性の変化を表す。

8) 嫁さんにする : sayksi-lo mantulta
嫁一lo 作る

次は人事や婚姻による資格や地位の付与である。前者が3例、後者が1例あった。対象者とその資格や地位が同一化される。

9) chyayonghata[採用する](1), ollita[上げる](1), sungcinsikhita[昇進させる](1); macta[迎える](1)
また、khiwuta[育てる]の例が1例あった。いずれも、対象者を lo が付加された名詞の表す物と同一視する。その他、10)のような例も対象物への何らかの物理的な働きかけによる同一視と言える。

10) kulita[描く](2), phyoyenhata[表現する](1); sayonghata[使用する](2), ssuta[使う](2)
また、「速達にする」の場合は「速達」は手段とも種類とも取れる。1例あった。以上は具体的な行為を伴う同一視であった。

具体的行為によるというより、概念・観念上のみでの同一視もある。tollita は本来移動動詞（他動詞）であるが、ここで使用された例を見ると「せいにする」のように「帰結、帰属」の意味を表しており、やはり同一性を表す。3例あった。また、11)のように理解・解釈の意味を表す例が3例あった。

11) ihayhata[理解する](1); haysekhata [解釈する](2)

さらに、概念・観念上のみでの同一視を一般的に表す samta[みなす]の例が27個あった。

このように、lo と hata 以外の動詞に翻訳されている65例のうち56例、約86%は「～ニスル」が同一性を表現していると解釈され、そのように翻訳されたと言うことができる。「～ニスル」の成立基盤である変化は、同一性という形で反映されている。

4-4 -lo hata

対象物に対し具体的に何をするか分かっている場合がある。その行為によって対象物と lo が付加された名詞の表すものは同一視される。12)の「しおりにする」の対象が何であれ、「しおり」は道具であって、その使い方は自明である。

12) しおりにするわ : sephyo-lo ha-lke-ya 《氷点》

しおり-lo する-推-終

位置についても具体的行為が自明のことがある。13)で「(この流れを)後にする」行為は、移動によって対象物(この流れ)が背中の方角になるようにすることで、言わずもがなのことであろう。しかも、「後にする」行為はそれに続く「上賀茂神社へと登ってゆく」間も続いており、登ってゆく、そのしかたを規定している。

13) この流れを後にして、上賀茂神社へと登ってゆくことになる : i hulum-ul twi-lo ha-ko

この 流れ-対 後ろ-lo する-順

kamikamosinsa-lo ollaka-key toy-nta 《陰陽》

上賀茂神社-方 登る-副 なる-終

次の14)も位置についてであるが、主語が無生物であり、文字通りの行為は表さない。また、13)の人間の目線から見た位置関係に比べると、14)のような地図上の位置関係はずっと抽象的である。しかし、「北緯四十度付近を中央部にする」こと、すなわち北緯40度付近が(日

本列島の) 中央部であることは、後に続く「一直線にならんでいた」の、その並び方を規定している。

14) 日本列島は……北緯四十度付近を中央部にして……一直線にならんでいたのではない

か : ilpon yelto-nun.pwukwi 40to pwukun-ul cwungangpwu-lo ha-ye.keuy ilcixsen-ulo nulese iss-ci

日本列島一話 北緯 40度 付近一対 中央部一lo する一順 ほとんど 一直線一具 並ぶ一状一否

anh-ass-na 《日本》

一過一疑

位置としては、他に「芯にする」が1例、「中心にする」が4例あったが、いずれもこれと同類であった。また、「底にする」は数学のことであるが、それは計算または式を作ることと密接に関連している。2例あった。

このように、二が付加される名詞の意味が抽象的になると、翻訳では hata に具体的行為を読み込むことは不可能で、かわりに、手段的意味合いが濃くなってくる。データには hata と samta の両方を使って翻訳された例があった。15)がそれである。最初の例は、「きっとみんなが反対するだろう」(翻訳ではより直接的に「みんなが反対することに備えて」とあるように「秘密にする」ことそのものを述べている。samta が使用されている。これに対し、二番目の例は、地殻変動を調べるために海底調査をしているのだが、しばらくは調査自体を、あるいは調査から分かったことを、国民あるいはマスコミに秘密にしつつ、調査を継続することを前提にした発話である。「秘密にする」はそれ自体というより、調査をすることの一側面を規定している。hata が使用されている。「秘密にする」が-lo hata'で翻訳された例は他に2例あったが、これと同じであった。

15) みんなに秘密にしたのは、きっとみんなが反対するだろう、と思ったから : motwu-ka

みんな一主

pantayha-l kes-ey taypiha-ye pimil-lo sam-ki-kkaci ha-yess-ta. 《トット》、どの段階まで秘密にするか :

反対する一冠 こと一處 備える一順 秘密一lo みなす一名一判 する一過一終

enu tankyey-kkaci pimil-lo hayya toy-nunya 《日本》

どの 段階一判 秘密一lo する・必 なる一疑

ここで、残りの例を調べてみると、そのうちの多くの名詞は、16)のように、言わば、何か別の目的のために存在するものを表す。

16) アルファベット順(1)、開放構造(1)、基礎(3)、基本条件(1)、手段(1)、対象(4)、土台(2)、もと(1) 計14

さらに、17)の5例を見てみると、最初は文学の分析方法のことであり、当然その方法で分析が行われる。その次も「神さんやご先祖さんを、主人公に」するだけで終わるのではなく、それが「おもてなし」の方法だと言っている。その次の「別にする」も単に「別にする」ことだけを言っているのではなく、「災害救助法」の適用回数の数え方を述べている。

17) 登場人物は名詞にして、その身分や性格などは形容詞にして、その行動は動詞にした

の : tungcang inmwul-un myengsa-lo ha-ko, ku sinpwun-ina sengkyek tung-un hyengyongsa-lo ha-ko, ku

登場 人物一話 名詞一lo する一順 その 身分一選 性格 など一話 形容詞一lo する一順 その

hayngtong-un tongsa-lo hayss-cyo. 《唯野》、神さんやご先祖さんを、主人公にして、みんなでお
行動一話 動詞一lo する・過一終

もてなしせんならん : sin-ina senco-lul cwuinkong-ulo hayse motwu pattul-e mosi-ci anh-umyen an toy-ci
神一選 先祖一対 主人公一lo する・順 みんな あおぐ一順 世話する一否一終 否 なる一終

《日本》、梅雨時の洪水を別にして、……地震によって被害救助法が適用されたのは、こ
れで三度目だ…… : cangma ttay-uy hongswu-nun pyel mwuncey-lo ha-ko, ……cicin ttaymwuney
梅雨 時一冠 洪水一話 別 問題一lo する一順 地震 ために

cayhaykwucopep-i cekyongtoy-n kes-un ikes-ulo seypencay-ci 《日本》
災害救助法一主 適用される一冠 こと一話 これ一具 3回目一終

このように、‘lo hata’で翻訳された例のかなりの多くが、様態、手段または道具的な意味をもっている。また、同時に対象との同一性も認められよう。なお、この様態、手段または道具的な意味は hata の形態とは関係なく現れていることに注意されたい。

目的語（対象物）の復元が難しい場合は選択の意味合いが濃くなる。18)の「靴にしよう」はプレゼントを考えている文脈で現れている。「靴」はプレゼントとして送るために選択されたものである。「白い服にする」は文中に「作る」という語があり、服の色をいろいろな色の中から選んで「白い服を作る」ということである。また、「何にしようかな」はバーでの発話であり、飲む（あるいは注文する）のに何を選択するかということである。

「何にする」が選択を表していると思われる例が他に1例あった。いずれも、行為者がどんな行為をするかきわめて明確である。hata の内容は自明だと言うこともできよう。

18) 靴にしよう : kwutwu-lo ha-ca 《博士》、作るのなら白い服にしたらと : kulehtamyen huy-n
靴一lo する一勧 それなら 白い一冠

os-ulo ha-nun key coh-keyss-tako 《氷点》、何にしようかな : mwues-ulo ha-ikka? 《唯野》
服一lo する一冠 こと・主 よい一推一引 何一lo する一疑

19)では行為の具体性ははっきりしないが、「遺産の形で相続するのを待っているのは嫌だから」とあり、財産分配の方法に関する選択だと解釈できる。

19) 遺産の形で相続するのを待っているのは嫌だから、贈与にしてくれ : yusan hyengsik-ulo
遺産 形式一具

sangsok=pat-nun kes-ul kitali-nun kes-i silh-uni cungye-lo haytalla 《理由》
相続=もらう一冠 こと一対 待つ一冠 こと一主 嫌だ一理 贈与一lo してくれ

選択の意味は同一性から導かれるとして差し支えないと思われる。

以上のように、‘lo hata’は同一性と様態・手段・道具、同一性と選択という、重複的な意味を持つ。ここで、同一性が共通しているので、同一性を‘lo hata’の成立基盤としてよいだろう。言い換えれば、同一性の上にさらに様態・手段・道具または選択の意味が認められるとき、‘lo hata’で翻訳される。

5. おわりに

「～ニスル」において、格助詞ニが付加された名詞が身体部位を表すときは、その大部

分が、その身体部位の機能に基づいた翻訳がなされていた。そして、それ以外の場合は、オリジナルの分析からも翻訳からも、「～ニスル」の用法を二分するだけの積極的な根拠がなかった。したがって、「～ニスル」は二つの類型に還元できる。また、この後者の類型は「変化」を基盤に成立していると思えるが、その一部は同一性として翻訳に反映されている。さらに、同一性の上に様態・手段・道具または選択の意味が読み込まれるとき、‘lo hata’で翻訳される。

ただし、様態・手段・道具の意味を同一性から直ちに導くのは困難なように思える。同一性、様態・手段・道具、選択の3つを統一的に説明するには、さらに検討が必要であろう¹⁰。

注

1) 森田(1979)からそれぞれ一例ずつ引用すれば以下のようなものである：

CヲDニする：息子を医者にする（森田 1979:253）

……CヲEニする：いやな噂を耳にした（森田 1979:254）

……ハ……ニする：ぼくは月見うどんにする（森田 1979:254）

2) 述語としての「スル」だけを問題にした。「スル」の主語や目的語が存在するか、あるいは想定できるかをその判断基準とした。

3) 連用形名詞はその動的意味が、形式名詞は修飾成分の意味が翻訳に影響を与えると推測した。なお、名詞か形容動詞の語幹かは筆者の直観によった。

4) 2例とも対数の底のことである。

5) 若干緩めに解釈した。また、品詞の異同は考慮していない。

6) 朝鮮語では格形式が表層に現れないことが尠あるが格関係は想定できる。また、「名詞+動詞」タイプの複合動詞においても、両者間の格関係を想定できる場合がほとんどである。さらに、格形式が表層に現れないときは、独立した語の連続なのか複合語なのかの区別が必ずしも易しくない。そういう事情で「(内部)格」と言うことにした。

7) 今回はこのケースは扱っていない。

8) どちらも日本語の「言う」に当たる。

9) tung=cita の cita の意味は確定できないが、背の後ろに物（目的語）が来るようにするというのが起源的な意味だと思われる。なお、朝鮮語の格助詞 lo は異形態 ulo を持つが、「～ニスル」の翻訳に関わる場合はグロスではどちらも lo で表示することにし、それ以外はその用法に基づいてグロスをつけた。

10) 任洪彬(1974)は lo が付加された名詞には姉妹項目があるとし、lo の基本的な機能を「選択」としている。「選択」は格関係を表す言葉らしくなく、姉妹項目の存在と lo が格助詞であるということの整合性も問題になろう。しかし、任洪彬(1974)が説得力に富んでいることは否定できない。

略号

引：引用、過：過去形、冠：冠形、冠形格、勸：勸誘形、疑：疑問形、逆：逆接形、共：共同格、具：具格、主：主格、終：終止形、順：順接形、處：處格、条：条件形、状：状態、推：推量・意志形、選：選択、対：対格、転：転成格、到：到達、否：否定、必：必須条件形、副：副詞形、方：方向格、名：名詞形、命：命令形、理：理由形、話：話題

用例出典

《陰陽》夢枕獯『陰陽師飛天ノ巻』文春文庫、文藝春秋／김소연『음양사 2 비천편』손안의 책.

《キッチン》吉本ばなな『キッチン』角川文庫、角川書店／김난주『키친』민음사.

《唯野》筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店／김유곤『다다노 교수의 반란』문학사상사.

《トット》黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫、講談社／김난주『창가의 토토』프로메테우스 출판사.

《日本》小松左京『日本沈没(上)』光文社文庫、光文社／의정희『일본침몰(上)』미래사.

《博士》小川洋子『博士の愛した数式』新潮文庫、新潮社／김난주『박사가 사랑한 수식』이레.

《氷点》三浦綾子『氷点(上)』角川文庫、角川書店／최현『빙점(上)』범우사.

《理由》宮部みゆき『理由』新潮文庫、新潮社／이규원『이유』청어람미디어.

言及した文献

國廣哲彌(1981)「翻訳の言語学」『月刊言語』10-12, pp.62-67,大修館.

森田良行(1979)『基礎日本語1』角川書店.

山中桂一(1998)『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ』東京大学出版会.

李光秀(1985)「日本語『する』動詞と韓国語『hata』動詞の対照研究」『日本語と日本文学』5, pp.1-11.

이희자·이종희(1998)『텍스트분석적 국어 조사의 연구』한국문화사.

任洪彬(1974)「{로}와 選擇의 樣態化」『語學研究』10-2, pp.143-159.